

先端社会研究所がシンポジウム開催 ホームレス支援団体の実践家2人が 先駆的な取り組みを報告

21(火)、西宮上ヶ原キャンパスで

関西学院大学先端社会研究所は2月21日、シンポジウム「支援活動から発見されるソーシャル・ディスアドバンテージ-ホームレス支援の現場から-」を学内で開く。

2002年に施行されたホームレス自立支援法を機に国内のホームレス数は大幅に減少したが、現在でも全国で6千人以上が状態が変わらないままの生活を続けている実態がある。

ホームレスという現象は、「物質的な貧困」のみならず「関係的な貧困」(家族がいない、人づき合いが乏しい、居場所がない等)が絡まることで生じると考えられている。そのため、近年では、個々人への丁寧な寄り添いが重要視されている。

今回のシンポジウムでは、先駆的な取り組みをしている二つのホームレス支援団体の実践家を招き、ホームレスの「ソーシャル・ディスアドバンテージ」(社会的不利)に焦点を当てる。社会福祉制度、財源、人材の問題にも触れながら、その解消に向けた方策について考える。

※一般参加可、無料、事前申し込み不要

■日時:2月21日(火)14時30分～17時30分

■場所:西宮上ヶ原キャンパス図書館ホール

■報告者(プロフィール):

・奥田知志氏(NPO法人抱樸理事長)

1963年生まれ。1982年、関西学院大学在学中に日本最大の寄せ場、釜ヶ崎と出会う。以来、生活困窮者支援・ホームレス支援に携わる。1990年、現在の日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師に就任。同時に北九州におけるホームレス支援団体であった北九州越冬実行委員会に参加し、事務局長となる。2000年、NPO法人北九州ホームレス支援機構(現 抱樸)理事長に就任。『生活困窮者への伴走型支援』(明石書店)、『「助けて」と言える国へ』(集英社)など著書も多数ある。

・川口加奈氏(NPO法人Homedoor理事長)

1991年生まれ。14歳でホームレス問題に出会い、ホームレス襲撃事件の根絶をめざし、炊出しや100人ワークショップなどの活動を開始。大阪市立大学に在学中だった19歳の時にHomedoorを設立し、シェアサイクルHUBchari事業等でホームレスの人や生活保護受給者累計180名以上に就労支援を提供する。世界経済フォーラム(通称・ダボス会議)のGlobal Shapersや、ウーマン・オブ・ザ・イヤー2013若手リーダー部門にも選出される。ABCラジオ「ほりナビクロス」レギュラーコメンテーター。

■司会:白波瀬達也

(社会学部准教授/先端社会研究所研究員)

■問い合わせ:先端社会研究所事務室(0798・54・6085)

アメリカの小学校に武者修行へ 現場で頼れる教員を目指す



教育学部4年生 青木大典(あおき だいすけ)さん

青木大典さん(教育学部4年生)は、大学卒業後の4月から渡米し、米国ワシントン州スポケーン市にある公立学校・スポケーンインターナショナルアカデミー(Spokane International Academy, SIA)で、ボランティア教員として教鞭をとる。今後3年間、米国の初等教育制度や、多様性に富む教育現場でのノウハウを学ぶ。



青木さんは小学生の頃から教員を志し、中高時代から積極的に教育現場の見学や教員へのインタビューを行ってきた。そのうえで、小学校教員の免許が取得できる関西学院大学教育学部に入学。「理論や知識だけでなく、各児童の個性に適した教育や学級運営ができる現場での実践力を上げたい」と、自主的に公立小学校で教育ボランティアをしたり、大学近隣の小学校では通学を見守るボランティア活動などを続けた。

渡米の転機となったのは、大学3年生の時。所属する藤木大三教授のゼミで、スポケーン市の小学校など9機関を訪問する研修ツアーに参加して影響を受けたという。「小学校ごとに特色を出すことが少ない日本と比べ、すべてでカルチャーショックを受けた。米国の初等教育の良さや、日本では学べないノウハウを実践で身につけたい」と意気込む。

この時に訪問したSIAの校長に直談判し、昨年の夏に授業補助のボランティアとして勤務する機会を得た。すべてが勉強になったが、特に学級運営、ICTの活用、外国語教育など日本では珍しい教育手法に衝撃を受けた。「米国は公立校でも学校ごとの特色や独自性が明確。児童は多国籍で、宗教や人種も様々なので、個人への対応も学ぶことが多い」と意欲を高めた。

4月以降は語学学校に通いながら、午後からボランティア教員として子どもたちを指導する生活になる。「米国ではが



むしゃらに頑張り、自分の強みをどんどん増やしたい。将来は日米の経験を生かして、現場で頼りにされる教員になりたい」と話す。